

私の体験を社会へ

渡辺孝子

一——はじめに

昔から「子は親の鏡」であるといわれる。私は小さい時から、母の口癖に、「人には良くしてあげなさい。私の代（母）に返ってこなくてもあなたの代には返るものヨ」、「自分の出来る範囲で無理をせずしなさい」って教えられました。知人の紹介で結核の患者さんの面倒をみると、田舎から単身で出てきた学生を励ましたり、割とこまめに動く人でした。こんな母でしたが、どちらかというと自分から進んでやるタイプ

ではなく、友人が持ってきたことのみに参加（手伝う）する人でした。

そして我が家には、いつも同じ顔ぶれが集まり、そこに手作りの菓子や茶を入れる母の姿がありました。自分の都合も考えずニコニコしながら茶を入れる母には、子供としてどう

しても我慢がならず「利用されているだけなのに」というと、母はさすが「いいんだよ、こんなことでみんなが喜んでくれるんだから」と、こんな調子なのです。人が来てくれるのを待つ母を見て育った私は、逆に外に進んで参加するようになりま

した。出会いによって多くの人とのつながりや、我慢すること、人前で恥をかくことを肌で覚えました。すべてが勉強の場となり、そこからボランティア活動としてのお手伝いが始まったのです。

二——実践活動

独身時代の大きなお手伝いは、久保山にあった^{注1)}「三春園」の子供たちを訪問したことです。園長さんのお話の中に、「物質面は一般家庭よりそろっているが、親の愛が、今一

- 一——はじめに
- 二——実践活動
- 三——母の入院、夫の入院そして死
- 四——体験を社会へ

番たりない」といわれた。私自身はまだ親の手を借りて生活していたので、里子など一日とてみることは出来ず、仕方なく、遊んであげる（もらう）ことで我慢してもらった。二、三回遊び相手になっていくうちに、野毛山動物園が開園した。当時、私は雑誌を通して友の会を作って会長をしていたこともあり、会に呼びかけ一日動物園の見学にいった。二列に並んだ子供たちと、園から裏山をぬけて、走って行った。けがもせず、無事に終ってホットした記憶がある。当時の神奈川新聞に小さく掲

載された。また、話がさかのぼりますが、小学生のころは子供会で相模原にあった兵隊さんの慰問をしたり、素人芸人の如く舞台上で踊ったりで町の人を楽しませました。

結婚によって大きな活動も出来ず、長男、二男とたてつづけに生まれたため、他人のことどころではなくなつた。二八歳のときに三人目の男児出産。この年は長男の幼稚園入園があり、クレヨンを始め学用品に名前を記入する作業が大変だった。

母となり、始めてのことゆえに、手作りの持ち物を喜々として作った。作品は、先生や父母の目にとまり、「作ったのーいいわネー教えて！」

この一言に、昔の虫がおき始めたのである。当時は、子供連れの習い事はご法度で、ただ夫の帰りを子供と待つ、こんな母親が多かった。そんななかで子連れ歓迎の集いが始まった。まず食べ物の話から、家では食べない子供も、五、六人集まると好き嫌いなく食べる。こんな小さなことが発見されたりした。次回は自分の家でほしいものを考えてくる。考

えたものにそって話合い、「作る」方向に持っていくた。(幸い、洋裁学校をでていたので、少しは役に立つ)親の年齢こそ違いがあつても、子供たちはみな同年齢を頭に、二、三人いるので、洋服の交換や、不要な物をリフォームして活用したり、そのうちにグループの家を回って会合をするようにした。

横浜ゼンソクという病名をもらった子供に、空気のいい所を探し、緑区に引越してきた。緑区が港北区と区分したばかりのころで、役所の親切なこと。いろいろ手続きしているうちに、三人の子供がそろって「鶴見に帰りたい」って言うのです。よくきいてみると、公園もなければプールや図書館もない。なるほど、子供の言う通り、お隣の坊やは自分の家の庭で自転車をスイスイ、公園などなくても平気なのです。我が子かわいさに、近くの空地を使用できるように担任の先生にお願いし、校長先生の許可と親の印鑑を押して貰いた。市民課の協力で、サッカーやフットボールの他流試合をし、近所に

いた体育指導員のお世話にもなりました。そうこうしているうちに市民課で、教育問題、フォークダンス、体操、俳句など、数々の講座が開催されたので、三男坊をつれて参加しました。区民会議にも出席し、バス

停、図書館、公園の問題などをお願いしました。発表するとき住所と氏名を言わねばならず、その都度、土地もない他者的存在にひとりかられ、だんだん足が遠くなりました。身体をこわし人様に面倒をみてもらう破目になったとき、自分の身体は自分で保持しなくてはと考え、平沼スポーツ会館に体操を習いに行きました。そのうち人数が増え平沼の抽選にもれたため、裏側にある県立三ツ沢スポーツ会館に入りました。ここではただ習得するだけでなく、地域に持ちかえて指導する目的の体操でした。「地域に体操を広めよう」をモットーに須田先生(現在港北高校の教頭)のビッチリつまった課程を修了し、リーダーとして一四年間活動しております。この間、順番で子供会の役が回ってきました。話合

いの結果会長となり、名簿作りから、子供会便りの発行をしました。

また子供を交通事故から守るために、通学時間帯に母親が旗を持って立つなど、いまだにこの旗振り是在学児童の母が行っています。そのほか、母親クラブを作つて、子供たちの育成をするグループに区では助成金八千円を二年間出してくれるという記事をみて、当時の委員さんたちで会を結成しました。今も年一回位は集まって、手芸をしたり食べべにしたり、何らかの形で活動を続けています。

三——母の入院、夫の入院そして
死

母が胃がんで入院する。毎日きまつたように、お医者様通い。そこを老人の憩の場にしていたのに、「要注意」とカルテに書かれたペン字をみた瞬間、「なぜ」と疑った。が、しかし手遅れだった、おむつを取りかえると、必ずと喋っていい程、「私は何も悪い事をしないのに、こ

んなことになってしまつて」と涙を流すのです、そして「スマナイ、スマナイ」といいながら、一カ月の命といわれたが何とか七カ月は生きていてくれた。本人は貧血・低血圧だと信じ、きらいな牛乳やレバーを一生懸命食べた。この七カ月間、パト的に（幸い姉二人と弟と嫁がいたので）自分の家の支障がないように話合つて通いました。これを機に、家庭看護法を習得、ついでに救急法も習いました。もつと早く習つていたら重たい身体を楽に動かすことが出来たのと思つた。その矢先、母の喪があげぬ昭和五十三年四月三十日、夫が後頭部の痛みと「疲れた疲れた」と連発にいうようになりました。各方面の先生にみて頂きましたが分らず、知人の紹介で、厚木のリハビリに入院することが出来ました。病名も「病原体」をスイスに送つて始めてついたようで、原因不明となつてゐる。七カ月間、いろいろな手法を用いて下さつたが、九月三十日、主治医から「命の保障がない」といわれた。私は、とっさ

に「二年ぐらい」と、先生の目をのぞきこむようにしてみたが、「全然動かず二カ月」とのこと。あとは声にならない。先生は本人の命の続く限りとの返事であつた。その日は、どうやつて我が家にたどりついたか、私自身わからない。とにかく玄関の鍵は無くすし、バスは終点まで行つてしまふしで、あの日の先生の目は忘れられない。宣告を受けた翌日は町内会主催の健民祭である。私が放送を担当していたため、「顔で笑つて心で泣いて」でもないが持前の明るさと、チョッピリ出たがり屋の精神で務めた。『死』という言葉は、私の胸の内に秘めて。十二月二十日、本人の希望で一応退院する。が、その日のうちに横浜市民病院に再入院。そして一〇日後の十二月三十日、夫は仮退院した。すぐ家でモチをついてゐると、会社の常務が見舞にきてくれた。いろいろと話をしているうちに「会社をやめてほしい、また、ゆっくり身体を治してかちきてほしい」と。この言葉が仕事いちずの夫に対してどれだけ痛手だ

つたでしよう。言葉によつて殺された」といつてもいい過ぎではないと思う。私にそつと語つてくれれば、いくらでも夫にはつくるえたのに、直接言うなんて。私も身体が震えるほどだった。なかなか入院できない立派ないいリハビリを退院し、少しでも、会社の近くに降り、通院しながらでも、と思つていた夫でしたのに。夫の方から「やめませ。やめます。僕の給料で大学生が雇えるんだから」と……。それからの夫は薬にたより、まるで薬中毒者のようでした。昼間は自分のそばにいてくれといい、午後眠りだしたすきに、掃除、洗濯、買物、すべて行う。昼と夜を間違えて、えんえんとおきている夫。あのころが一番大変な時期だった。知人から「針がいい」といわれるとすぐやる。お灸、マッサージはもちろんのこと、温泉、占い、何でもやつた。五十四年の十月、通院途中で倒れた。「膝が笑う」というけれどまったくその通り。大の男がガタガタと崩れるようにして倒れた。近くに姪の家があ

り、一晩泊めてもらった。「ゆっくりやすめた」と夫がいったけど、家庭という重荷から離れてホットしたのではなからうか。その日入院、六日後手術、この間、いろいろな人と出合う。個室ではお互いによくないので、大部屋に入る。奥のカーテンの中には植物人間になつてしまつた人もいたが、声をかけると瞳が動く。何んとも悲しいことである。愛のムチといいながらベット体操をさせてみる。動けない腰を少しでもいいからあげるようにする。話の中にユーモア入れて、紙風船を使つてのバレーボール大会。言葉を忘れたエリート部長さんにゆっくりと大きな口をあげて声を出す訓練。手の利かない人には、口でくわえてもいいからババ抜きをしたり、また本を読んできかせたりした。約二年間の入院中、数々の患者さんや家族と出合つた。このとき、夫の医療費は、私が離婚すれば無料になると聞いたけど、そんなことも出来ず、カウンセラーや民生委員さんにも相談にのつて頂いた。区の福祉課から、入院中

の夫をみにきてくれたり、とにか
く、沢山の人にふれあい、生きた体
験をした。

「男子厨房に入らず」という我が
家でも、そんなこといっておられな
かった。中三の三男と会社勤めの二
男とて、お風呂や、食事の仕度をし
て待っていてくれる。「おかえり、
父さんは」と、必ず私より先に声

をかけてくれる息子。「泣いてなど
いられるもんか」と、こういう私と
てやはり女である。病院を出てバス
に乗り、降りるまでは、普段と変ら
ぬが、バス停を降り、小高い丘の上
に達し、下るころは自然と涙がこ
ぼれる。この道は、私に取って「涙
道」である。二月、三月の夜の道
は、風も冷たく、本当にきびしかっ
た。大勢の友からは、便りや、電話
が入り、どれだけ私を救ってくれた
ことでしょう。こんなこともありま
した。友の紹介のお医者さんが、お
休みの貴重な時間、電話を通してで
したが私の気持をきいて下さいまし
た。先生は、「主治医を信じなさい」
とやさしい言葉と口調でいってくれ

た。あれ以来、私は、心の動揺した
人からの電話は、何時間でもきいて
あげることにしている。今、三人の
友が、私の声を聞くと気持がサツパ
リするといってくれる。ありがたい
ことである。

四——体験を社会へ

「女は仕事を持つな」ちよつと内
職をしようものなら、「僕が子供を
みてるから、働きに行け！」なんて
主人に怒られつづ二三年間やってき
たものです。子供も、私が仕事に出
るといふと、三男坊などは特に、「家
にお金ないの」なんて心配する。そ
れでも二男、三男は私のすることに
対しては、寛大である。長男はちよ
つと主人に似てきたためか、それと
も長男だからシツカリしなければと
いうつもりか、わりと厳しい。その
彼が横浜市社会福祉協議会からの探
用通知がきたときには、一言で賛成
したので、二人の息子は、ア然とし
た。「お母さんには、一番あったお
仕事だよ」だって。長男の「行って

みれば」の一声で決心した。

朝から夕方まで、一五日間も研修
があった。そして、横浜市ではじめ
てといわれる「老人福祉センター」
・「地区センター」・「温水プール」
・「障害者保養所」の四施設が一体
となった「都筑ふれあいの丘」に通
いはじめた。昨年十一月のことだ
す。

今までは、一市民として利用する
立場だった私が、「どうぞ、ごゆっ
くり」「またどうぞ、大いにセンタ
ーを利用して下さい」などと、元氣
に声をかけています。段々に仕事に
も慣れてきて、センターのオーブン
以来、連日忙しかった館長はじめ職
員の皆さんとも、話合いをする余裕
がでてきました。

「老人福祉センター」のあり方な
どというとおおげさですが、何でも
気楽に、職員の皆さんとで話し合っ
ています。お年寄りに歌や踊りなど
のレクリエーションの場を提供し、
お風呂でゆっくり楽しんでもらう。
特に孤獨な老人にとっては、センタ
ーに来ることが大きな楽しみだと思

います。そして私がそうだったよう
に、他の土地から引越してきて、地
域になじみの薄い人の多い横浜のよ
うな都市では、市民どうしお互いの
ふれあい・つながりを強めるために
も、センターの果す役割は大きいと
思います。

でも、これとは別にちよつと考え
させられることがあります。

それは年金を受け、バス料金が無
料でそのうえ利用料まで無料だとい
うことです。一概に老人とはいって
も、高齢化社会にあつてまだまだ元
氣です。民謡、踊り、食べて、お風呂に
入って顔つやもよい老人たち。「この
センターは楽しい」と、口々に話し合
っているのを聞いていると、うれし
いけれど何か割りきれないものを感
じます。夫と母を看取った私には、
寝たきりの方や、少しは歩けても自
力ではセンターまで来られないお年
寄りのことが気がかりです。この老
人福祉センター「つづき緑寿荘」の
ような生き生きとしたところで、せ
めて月に一度でも、こういう方々を
大きなお風呂に入れてあげたいと思

います。

在宅で寝たきりの老人を介護する「デイ・サービス」という制度がある^{注②}と聞いています。この制度の一環として、何か私たちでお手伝いできないかと、センターの職員も真剣に考えています。当面は、城田館長と職員有志によるお昼の「一〇分間講話」や緑保健所の「衛生教育」が企画されているとのこと。

皆さんがこれからの高齢化社会を健やかに、より充実した日々を送ってほしいと思う。そして、できることならより広い視野にたつて、利用を全て無料とするのではなく、健康で元気な方には、それなりの負担をお願いする。そのお金を、例えば、センターまで自力では来られない方のための「送迎バス」の費用に充ててもいいと思います。

私の任期は一年間で、勤務は奇数月の午後です。空いている時間は、手芸、体操をしている。いろいろなボランティア活動で、声がかかればどこへでも飛んで行きます。私のほかにも、まだまだ大勢の主婦が、少しでも社会のお役に立ちたいと望んでいます。

この力を集め、皆で少しでも社会を明るくしたいと思います。

(1) 現在の本市三春学園(養護施設)

保護者がいないか、またはいてもその保護者が監護できないものや監護させることが不適当な児童を措置する施設。

現在地—金沢区富岡東三—二—一九

(2) 在宅の虚弱老人等に対し、通所方式(バスによる送迎)により入浴、食事、日常動作訓練等のサービスを行う。本市民生局の事業の一環として昭和五十八年三月から特別養護老人ホーム「やまゆりホーム」で実施。

△横浜市社会福祉協議会・パート・コミュニティボランティア▽